

会員の広場



魅惑の量子論

吉成 正夫（東京）

はじめて「量子」という言葉に出会ったのは二〇一六年のことです。その頃は「人工知能」が脚光を浴び、その延長線上に「量子コンピュータ」が登場してきました。ところでこの「量子」とは一体何だろうと物理学者が易しく解説した本をいろいろ読みました。そ

こには実に不思議で魅惑的な世界が広がっていたのです。

量子の特性としてまず挙げられるのは「粒子であって波である（量子の二重性）」です。量子の環境が変わらないときは波の状態を現しません。ところが環境が変化したりライバルが現れたりしますと粒子となって姿を現します。量子どうしが連携し進化を遂げることもあります。そのように進化していまの「生命誌」が創られてきました。量子の動きは変幻自在で魅力的な存在です。

量子の特性から抽出される一例として「関係性」と「変化」があります。「人間社会」の在り方に多くの示唆をあたえてくれます。また発想の源泉にもなります。量子論の魅力を友人た

ちに話してもあまり興味を示してくれません。

そこで本年四月「量子論で見る社会と経済」（東京図書印刷）を書くことで考えをまとめました。「論理性」を重視するこれまでの投資理論や主流派経済学とは異なる考え方ですから多くのご批判を覚悟していました。今のところは「量子論のコンセプトを再認識した」「文理融合を先導している」「新たな視野が広がった」などの好意的なご意見を寄せて頂き意外でした。

量子の特性には他にも「量子は運動量を有するが内部構造をもたない」「量子は相補性である（陰陽相俟って世界を創る）」「量子はたった一つに決まらない曖昧な存在である（不確定性原理）」「量子もつれ」などがあり

ます。量子力学の研究がさらに進むと「生命」とは「意識とは」といった基本的な課題も量子論で説明されそうです。

そればかりではなく「インフレ問題」「ウクライナ戦争」などの今日的な課題も読み解いていくことができます。それには優れた情報収集、「彼我」のデータ蓄積と分析、そして洞察力が求められます。時間が経つと関係性が変化していきますので考察が終わることはありません。

いまの日本は多くの難しい課題を抱えています。それはこれから社会に出る若ものたちの双肩にかかっています。そのためにも量子論に関心を深めて現実的な対応へと思索を巡らせてほしいと願っています。